

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

『新篇 会津風土記』と由緒一大槻太郎左衛門の乱  
を事例に一

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2019-07-30 キーワード: 作成者: 田崎, 公司, TASAKI, Kimitsukasa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/827">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/827</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『新編 会津風土記』と由緒

―大槻太郎左衛門の乱を事例に―

はじめに

一、『新編 会津風土記』の概要

1 『新編 会津風土記』の編纂過程

2 会津藩野沢組における地誌

二、大槻太郎左衛門の乱 ―天正六年という画期―

1 天正六年という時代

2 『新編 会津風土記』における記載

3 「大槻太郎左衛門の乱」物語の拡散

4 周辺自治体史での大槻太郎左衛門の乱

三、村役人及び重立ち層の由緒創出

1 寺社・旧郷頭家の由緒創出

2 肝煎層・豪商の由緒創出

3 狐敵討物語への反映

むすびにかえて

田  
崎  
公  
司

はじめに

二〇〇〇年前後、日本中世・近世史研究において、特に後者において由緒論の議論がさかんであった。歴史学研究会編「シリーズ 歴史学の現在」の第十二巻は『由緒の比較史』<sup>①</sup>であり、「江戸」の人と身分」の第二巻も『村と身分と由緒』<sup>②</sup>と「由緒」を表題に掲げ、江戸時代における身分制度下の村社会を、百姓・大庄屋(大名主)・郷士、さらには被差別民らの上昇願望と差別意識などから明らかにしている。

かつて久留島浩氏は、こうした研究動向を総括して、近世を「由緒の時代」であると表現し、近世の諸社会集団やイエが、由緒によって権利を主張していた時代であるとした。村(ムラ)の由緒は、地域社会の歴史を通じた自己認識(アイデンティティ)であるが、近代国家が国民国家として自己形成をはかるとき、さまざまなレベルで国民統合が不可欠となり、特に文化統合を進めるさいには、新たな伝統が創出される。ここに由緒の「大衆化状況」を前提とした新たな伝統が創出されるのである。何よりも久留島氏の提起は、エリック・ホブズボウムの「創られた伝統」論<sup>③</sup>に大きな示唆を受けながら、「由緒の時代」や由緒の「大衆化状況」を、近代を志向する十九世紀の問題として理解しようとする特徴を持つものである。

翻って本稿では、【表1】n『新編 会津風土記』<sup>④</sup>巻之九十四「河沼郡野沢組野沢本町」の項に、かなりの紙幅をもって記載される「大槻太郎左衛門の乱」の叙述を事例として、地域における由緒の問題を考えるものである。すなわち会津藩庁官撰による会津藩領(本領・預かり地)に関する地誌に記された地域の歴史叙述と実際に当該地域にすむ住民、特に村役人層や重立ち層にとつて、『新編 会津風土記』に「大槻太郎左衛門の乱」の記載が存在するという事実が、どのような意味を持ちうるのかということと、どのような受容のされ方をするのかということとを考察することによって、中間層(会津地方においては村役人層)を中心とする地域史の問題に接近するものである。

## 一、『新編 会津風土記』の概要

### 1 『新編 会津風土記』の編纂過程

【表1】n『新編 会津風土記』は享和三年(一八〇三)から文化六年(一八〇九)にかけて編纂されたのち、江戸幕府に上申された地誌

【表1】『新編会津風土記』関係の主な書物

資料名	成立・完成年	著者・編者	備考
a. 塔寺八幡宮長帳	寛永年間	心清水八幡宮	貞和6年(1350)からの会津の歴史
b. 輔養編	承応元年(1652)	保科正之・土岐長元	4代将軍徳川家綱の輔養書
c. 会津四家合考	寛文2年(1662)	保科正之・向井吉重	蘆名・伊達・蒲生・上杉四家の来歴及び合戦
d. 寺社縁起	寛文5年(1665)	保科正之	領内の寺社縁起
e. 玉山講義附録	寛文5年(1665)	保科正之・山崎闇斎	朱子の『玉山講義』解説
f. 二程治教録	寛文5年(1665)	不詳	『二程全書』抜書
g. 会津風土記	寛文6年(1666)	友松氏興	会津初の本格的な地誌
h. 伊絡三子伝心録	寛文9年(1669)	不詳	二程子の三門弟の所説
i. 会津神社志	寛文12年(1672)	保科正之	古社268社列記
j. 会津旧事雑考	寛文12年(1672)	保科正之・向井吉重	神武天皇即位元年からの編年
k. 土津霊神事実	寛文12年(1672)	友松氏興	藩祖保科正之の伝記
l. 土津霊神言行録	貞享元年(1684)	横田俊益	保科正之関係の諸記録
m. 会津鑑	寛政元年(1789)	会津藩編集方	漢文体による地誌
n. 新編 会津風土記	文化6年(1809)	田中玄宰	『会津風土記』の全面改訂
o. 家世実紀	文化12年(1815)	会津藩編集方	会津藩の基本資料
p. 諸土系譜	天保4年(1833)	会津藩編集方	独礼以上の藩士1085家の由来
q. 会津温故拾要抄	明治22年(1889)	宮城三平	近代になっての本格的な地誌

出典：福島県会津若松市立会津図書館所蔵資料他より作成。

【表2】 会津藩領主変遷

蘆名盛氏	天文10年(1541)4月～天正3年3月
盛隆	天正3年(1575)3月～天正12年10月(暗殺)
亀王丸	天正12年10月(1584)～天正14年11月(夭折)
義広	天正15年(1587)3月～天正17年6月(常陸国水戸に出奔)
伊達正宗	天正17年(1589)6月(出羽国米沢より)～天正18年7月(出羽国米沢へ)
蒲生氏郷	天正18年(1590)8月(伊勢国松坂より)～文禄4年2月
秀行	文禄4年(1595)2月～慶長3年2月(下野国宇都宮へ)
上杉景勝	慶長3年(1598)3月(越後国春日山より)～慶長6年8月(出羽国米沢へ)
蒲生秀行	慶長6年(1601)8月(下野国宇都宮より)～慶長17年5月
忠郷	慶長17年(1612)5月～寛永4年正月(世継なく死亡)
加藤嘉明	寛永4年(1627)4月(伊予国松山より)～寛永8年9月
明成	寛永8年(1631)9月～寛永20年5月(奉還)
保科正之	寛永20年(1643)7月～寛文9年4月
正経	寛文9年(1669)4月～天和元年2月
松平正容	天和元年(1681)2月～享保16年9月
容貞	享保16年(1731)9月～寛延3年9月
容頌	寛延3年(1750)9月～文化2年12月
容住	文化2年(1805)7月～文化2年12月
容衆	文化3年(1806)2月～文政5年2月
容敬	文政5年(1808)2月～嘉永5年2月
容保	嘉永5年(1852)2月～慶応4年(1868)2月

出典：『日記 蘆名 蒲生 加藤 保科分限帳 全』(寛文5年12月、福島県喜多方市末広町・斎藤安俊家所蔵)・『会津松平家家譜』(前掲、会津図書館蔵)他より作成。

である。まさに十九世紀冒頭に現れた地誌とされ、巻之一(概要)から巻之百二十(外篇下野国塩屋郡)までの百二十冊から構成されている。冒頭には会津松平家(御家門)七代藩主・松平容衆の自序があり、藩内古文書、領内(陸奥国会津郡・耶麻郡・河沼郡・大沼郡の一部・安積郡福良組、越後国蒲原郡の一部、魚沼郡の一部、下野国塩谷郡河島組)の界域・山川・原野・土産・関梁・水利・郡署・倉廩・神社・寺院・墳墓・古蹟・狝門・人物・旧家・褒善の十六部門にわたり記述されている。一般に、江戸幕府の地誌編纂事業のモデル的役割を果たすものとして編纂された地誌であると同時に、江戸時代における日本の代表的地誌とされる。この間の事情については、享和三年、会津藩会所のなかに編纂役場が設けられることで編纂事業が開始された。この時期、地誌編纂のために藩は領内の村々に書上げを命じているが、その関係文書の中に「地志方」という呼称も用いられている。

幕末までつづく御家門・会津松平藩の藩祖である保科正之(二代将军徳川秀忠の庶子)は、諸国の風土記が散逸するのを歎き、g『会津風土記』の編集を命じた。この風土記は二代藩主正経の時に完成し幕府に献上される【表2】。

そののち寛文期の【表1】g『会津風土記』を基とし、それを仮名文に直し、「古蹟事実」等を詳細に編纂の打診が幕府より伝えられた。それは他大名家の手本となり、その書が完成したら老中・松平伊豆守(信明)を通して將軍にも献上される予定であり、それを心掛けて調査を始めるようにという話が伝えられる。

会津の国許において、城下の会所内に編集之役場を設け、数名に編纂の御用懸りを任命し、文化六年(一八〇九)にいたり、『新編 会津風土記』と題号し、全百二十冊の書として完成し、幕府に献上した。最高責任者は、『日新館志』巻之十八(福島県会津若松市立会津図書館蔵)によれば家老・田中玄宰であった。幕府が『新編 武蔵風土記』の編纂に着手するのは翌文化七年のことであり、『新編 会津風土記』の編纂はそれより七年も早く着手され、完成をみていたことになる。

完成した『新編 会津風土記』は、冒頭には文化六年三月と記された七代藩主容衆の序文があり、詳細な凡例が付されている。その凡例によると、編纂は享和三年に命を受けて始まったものであること、保科正之の編纂した寛文期のg『会津風土記』を手本としたことが述べられている。内容は土俗に伝わる旧聞を収録したとされる。なかには疑うべきもの(曲筆)もあるが、伝えるままに記し、古書で参考になるものがあれば、その説も付したと記している。採用した郡名・郷名・組名等についての注記もある。

とりあげた村については、旧別村であって現在は属村(端村・枝村のこと)となった村、また旧属村であって現在廃れている村等種々変遷があるので、文化二年(一八〇五)段階の状況で取り上げたこと、また村名の表記も寛文期の『会津風土記』・元禄絵図等に表されている文

【表3】 野沢組の主な地誌

資料名	成立・完成年	著者・編者	備考
a. 河沼領野沢組万改土地帳	寛文5年(1665)	五十嵐文五郎カ	のち五十嵐八郎筆写
b. [川沼郡野沢組百姓民間営風俗改書]	貞享2年(1685)	長谷川久七郎	野沢組の風俗書
c. 野沢郷毎村委記	不詳	長谷川久七郎カ	野沢組の地誌
d. [万書留旧記]	不詳	長谷川久七	野沢組郷頭による覚書
e. 古伝記	天明4年(1784)	五十嵐文五郎カ	飢饉の記録
f. 河沼郡稲川庄野沢郷 野沢原町村	享和3年(1803)	小沢勇四郎	野沢原町族司による地誌
g. 旧記 全	文化5年(1808)	長谷川万右衛門	野沢組を中心とする地誌
h. 旧記 八	不詳	長谷川久七	野沢組郷頭による覚書
i. 鎮守熊野神社縁基	文政5年(1858)	大聖院法印明順	野沢原町村社縁起
j. 万書留旧記	文政年間	長谷川久七	野沢組郷頭による覚書
k. 新編 会津風土記 野沢組	慶応年間	五十嵐八郎校訂	野沢検断職による校訂
l. 旧記書抄	慶応年間	山本定平	野沢組内の旧記の収録
m. 新編 会津風土記 野沢組(閑居随筆)	明治年間～	野澤雞一校訂	野沢原町出身者の校訂
n. 河沼郡案内	明治43年(1910)	河沼郡役所	簡潔な河沼郡誌
o. 野沢小学校郷土誌	明治43年(1910)	野沢小学校	明治末期の郷土誌編纂
p. 尾野本小学校郷土誌	明治43年(1910)	尾野本小学校	明治末期の郷土誌編纂
q. 群岡小学校郷土誌	明治43年(1910)	群岡小学校	明治末期の郷土誌編纂
r. 野沢みやげ 大山祇神社案内	明治44年(1911)	佐瀬三餘	観光パンフレット

出典：旧西会津町史収集資料他より作成。成立・完成年が不詳の資料は、記載された内容から組み込んだ。

字にかかわらず、文化二年の使用文字に拠ったことが記されている。多くの書物が流布しているが、引用に耐えうる書物は、寛文期に向井吉重によって著された【表1】・j『会津旧事雑考』・c『会津四家合考』のみであり、従ってこの二書を参考にしたこと、しかし寺社創建の年月に関しては、『会津旧事雑考』の誤りは正したと記している。その他使用文字についての詳細な注記がなされているのも特徴としてあげられる。

『新編 会津風土記』に記されている郡役所・代官所は、天明七年(一七八七)に旧来の制度を改めてから設置したものであると断っており、寛政期の藩政改革以後の地方支配のあり方を反映したものと考えられる。何よりも『新編 会津風土記』は、徳川幕藩体制の建て直しが急務となっていた寛政期前後、改めて支配の基盤を再調査し再確認しようと志した幕府の地誌編纂事業の先駆けとして、モデル的役割を果たす書として編纂された地誌であったという評価が与えられる。

## 2 会津藩野沢組における地誌

会津藩野沢組の地誌は、【表3】に示されるように本来は野沢内郷組郷頭(初期は橋谷田又右衛門家)であった五十嵐文五郎(九朗三郎)家と野沢新郷組郷頭(初期は伊藤理兵衛家)であった長谷川久七(伴右衛門)家が、併合された野沢組郷頭職と野沢宿駅検断(問屋)職就任の正統性をめぐって編纂されている。五十嵐文五郎家は、

藩祖である保科正之により耶麻郡慶徳組郷頭より野沢内郷組郷頭に移されたのち野沢宿本陣亭主である家系であることを、長谷川久七家は松尾村地頭・宇多川信濃守道忠の家系であることを自分たちの由緒として主張していた。なお郷頭は、大名主・大庄屋に相当する。

最終的に長谷川久七家が幕末維新にいたる野沢組郷頭職を世襲し、残存する地誌の数も【表3】にみられるように圧倒的な冊数である。長谷川久七家は会津藩家老・西郷頼母家の譜代になるなど家格上昇にも精力を注いだ。それに対して五十嵐文五郎(九朗三郎)家は野沢宿本陣亭主役を山口村肝煎の鈴木弥次右衛門、つづいて野沢原町村南分肝煎の渡部賦左衛門(佑吉)に「篡奪」され、五十嵐八郎(俊興)が城下若松の家老・萱野権兵衛や諏訪大四郎の譜代になりながら家の復興を目指した。五十嵐八郎は野沢原町村北分肝煎の斎藤兵右衛門(安頼)〔野沢原町草分けの六人衆の一人・松原但馬の子孫だとみなされる〕の総領娘であるクラ(倉)と結婚することにより、野沢代官所帳書と野沢宿駅検断に復帰している。五十嵐八郎は古文書を収集し【表1】n『新編 会津風土記』の訂正をおこない【表3】a『河沼郡野沢組万改土地帳』や【表3】k『新編 会津風土記 野沢組』を残している。この事業は、五十嵐八郎の義弟となる斎藤九八郎(のちの野澤雞一)に引き継がれ、【表3】m『閑居随筆』(兵庫県尼崎市・野澤九八郎家文書)につながっていく。なお肝煎は、名主・庄屋に相当する。

異例な地誌として野沢代官所族司(代官下役)小沢勇四郎によって書かれた【表3】f『河沼郡稲川庄野沢郷 野沢原町村』があるが、これは明らかに『新編 会津風土記』編纂の下準備に記されたものである。興味深いことに小沢の記載の全てが採用されているのではなく、何らかの形で記述の取捨選択がなされている。様々な家文書から、会津藩庁地誌方に向けた書上げ草稿がみつかっており、この地誌も会津藩下役たる小沢がまとめあげたものであろう。

また野沢原町村の鎮守(村社)である熊野権現と秋葉権現(將軍地蔵)の神官である本山派法印大正院も由緒の創出に取りくむ。あとで取り上げるが、大正院は大槻太郎左衛門の子孫をも主張している。さらに野沢原町村の商人・喜島屋(または佐野屋)山本定平(安信)の【表3】1『旧記書抄』は本格的な野沢組の地誌であり、全五巻と数冊の別巻がある。山本定平は五十嵐八郎と前後して野沢代官所の帳書を務め、熊野権現や当山派法印常法院の道場で家塾・安信塾を開き、幕末維新期を第一線で生きていく人材の教育に努める。

五十嵐八郎や山本定平、そして長谷川久七(伴右衛門)の【表3】g『旧記 全』・h『旧記 八』も含めて、野沢組の地誌の本格化は『新編 会津風土記』の編纂と発刊の影響が大きい。また『河沼郡稲川庄野沢郷 野沢原町村』にみられるように、会津藩庁に採用された事例や不採用となった事例を含めて、その史実伝承を地域やそれぞれの家がどのように評価していくのか、この時代に生きていた人びとの期待を込めた様々な思惑を感じることができる。

近代になって編纂された【表1】q『会津温故拾要抄』は、耶麻郡吉田組元郷頭・宮城三平（盛至）によって編まれた『新編 会津風土記』を再考した地誌であり、近代国家日本が要請する地域のあり方を反映している。宮城三平は野沢組郷頭・長谷川久七の親族であり、その地位と親族関係を活用して、明治の『会津風土記』を編纂するのである。

その流れの中で、明治後期からの地方改良運動の一環として、【表3】n『河沼郡案内』・o『野沢小学校郷土誌』・p『尾野本小学校郷土誌』・q『群岡小学校郷土誌』が編纂されている。

## 二、大槻太郎左衛門の乱 — 天正六年という画期 —

### 1 天正六年という時代

天正六年（一五七八）三月九日、越後の龍・上杉謙信（旧名長尾景虎）は小田原を根拠とする北条氏が跋扈する関東への大出兵を前にして厠で倒れ、昏睡状態に陥り、四日後の十三日に死去した。享年四十九歳であった。同年三月二十四日の上杉景勝書状では「去る十三日、謙信不慮之虫氣、取直られずして遠行」（『上杉古文書』山形県米沢市立上杉博物館所蔵）とある。「取直られずして遠行」とは、謙信の意識が戻らず脳卒中により、いびきをかいて眠りながら死んでいった症状に合致する。

一方、『上杉三代記』（前掲、上杉博物館所蔵）では、織田信長との通謀を疑って手打ちにした柿崎景家の亡霊に悩まされ、病みついて死にいたったという。同書では「その後、柿崎の亡魂、度々出て、謙信の目の前に現れて恨みを申す。謙信怒ること三、四度に及ぶ。これより気疲れ、病氣つき給う」と説明し、心労より体力が衰え、ついには病氣になったとする。さらに『武者物語』（前掲、上杉博物館所蔵）も基本的に同説を踏襲するが（同書において謙信は柿崎の亡霊にあつても動じなかったが、まもなく死去する）、『当代記』（前掲、上杉博物館所蔵）では「大虫」、すなわち「中氣」（中風）説、他にも織田信長が放った忍びによる暗殺説、過度の飲酒による胃癌説などがある。

この謙信死去の噂は、東の隣国・会津でも大きな波紋を呼ぶ。三月二十五日、小田原北条分家で八王子城主の北条氏照が、芦名蘆名・葦名、以下本文では芦名で統一）盛氏の家臣・荒井釣月に書を遣わし、上杉謙信自殺の虚実を問い（【表1】c『会津四家合考付録』）、二十六日には、芦名盛氏が家臣・小田切孫七郎に上杉謙信死去の実否を探らせる（『伊佐早文書』東京大学史料編纂所蔵）。四月三日、上杉景勝が芦名盛氏に

地図 「大槻太郎左衛門の乱」 関係地図



上杉謙信死去を報じ、和平を乞うが(『上杉家文書』前掲、上杉博物館所蔵)、二十六月、盛氏は上杉景虎に応じて、越後に攻め入る。所謂「御館の乱」が勃発するのである。

野沢郷地域周辺からは、芦名方として野沢原町村の大槻清兵衛や奥川郷中町村の矢部宮内、そして下野尻村とみられる石川藤左衛門が出陣し戦死する。この戦の背後には、天正六年二月に野沢郷を中心に勃発した「大槻太郎左衛門の乱」が大きな影をおとしている。何よりも、野沢郷は会津と越後の中間に位置する軍事的要地である。

## 2 『新編 会津風土記』における記載

【表1】n『新編 会津風土記』卷之九十四・野沢本町【史料1】によれば、大槻政道(政通が正しい)は、大庭駿河守政長の子であり、太郎左衛門と称した。本姓は平姓三浦流の北田氏、遠祖は佐原十郎義連の子孫とされる。芦名氏の一族・功臣ではあるが、しばしばその功を誇って驕奢の行いがあり、その禄を削って野沢郷地域の野沢原町・茅本(現、萱本)村他に僅か三十貫文地が与えられた。

野沢本町の大槻館(現、野沢山遍照寺)は東西三十四間・南北二十四間。太郎左衛門はここにあること三年、野沢横町にあった荒井館(現、西会津町役場)に移るとともに、芦名氏の仕打ちを憤り、密かに娘婿である西方鳴ヶ城(現、大沼郡三島町)の地頭山内重勝と共謀し、越後国春日山城(現、新潟県上越市)の上杉謙信に内応して恨みを晴らそうとした。重勝もまた一族の河口(現、大沼郡金山町)の地頭・川口左衛門佐を誘うことを考え、斎竹という盲人を使者として遣わしたが、左衛門というところでこの密書を落としてしまった。密書は拾われて、黒川の芦名方に送られたため、太郎左衛門の陰謀は芦名盛氏の知るところとなり、盛氏はただちに兵を発し、大槻勢を討つ大勢を整えた。

太郎左衛門は報せを聞くと、山内重勝と協議し、下野尻の薄(村岡)某・小島の成田右馬亮・夏井の赤城(夏井)玄蕃と協議して、天正六年(一五七八)二月十三日、片門(現、会津坂下町)の渡しに兵を出した。一方、芦名盛氏もまた平田舜範・佐瀬常教・富田氏実・伊藤大膳(元、大槻館主の一族)らに命じて片門の渡しに向わせ、自らは金上盛備・生江基氏・松本輔光・新国頼基らの武将を率いて柳津の渡しに向った。柳津の渡しでは、互に只見川の峻阻に陣を構えて二日ほど戦ったが、兵数において劣勢であった山内勢は壊滅に瀕した。大槻太郎左衛門はこれを聞いて手勢を分けて援けようとしたが、援兵の到着しないうちに山内勢は敗れ、山内重勝は西方に退いて自殺してしまった。

大槻太郎左衛門は力を落し、一族郎党ら三十余人と密かに越後国の山内の領地に赴こうとしたが、雪が降りしきり、空腹に苦しんだ。太郎左衛門一行は種子池淵(現、大沼郡金山町宮崎)の岩屋の中にこもり、雪の晴間を待った。そこに獵師の孫兵衛という者が通りかかった。太郎左衛門は孫兵衛に食糧と鞋を所望し、礼に判金一枚を与え、さらに上條の方へ案内を願った。孫兵衛は承知し、その足で川口左衛門佐の許に行き、太郎左衛門の居場所を伝えた。

川口は軍勢を集め、孫兵衛を先頭に立てて岩屋に押し寄せた。岩屋の四方より鬨の聲が挙がり、川口勢が岩屋を取囲み、孫兵衛を先頭に立てて押し寄せてきた。ところが孫兵衛は足を取られ、太郎左衛門の前に転げ落ちた。太郎左衛門は怒り、孫兵衛を刺殺し、自らも川口に討たれ、その首は芦名盛氏に献じられた。<sup>10)</sup>

【史料1】『新編 会津風土記』卷之九十四 野沢本町

大庭太郎左衛門政道(通)ト云者爰ニ住シ大庭ヲ改テ大槻ト称セリ、大槻ハ葦名家ニ功アリシ者ニテシハシハ其功ニホコリ驕者ノ行アリケレバ、ヤ、其祿ヲ削リ僅ニ三拾貫文ノ地本町野沢原町茅本村ヲ与テ此館ニ蟄居セシム、後野沢原町ノ館移リ住セリ、居コト三年、大槻此コトヲ憤リ密ニ己カ婿ナル西方村大沼郡滝谷組ノ地頭山内右近ト云者ト謀シ合セ上杉謙信ニ内応シテ怨ヲ報セントス、右近モ又河(川)大沼郡大石組川口左衛門佐ト云者ヲカタハラントテ斎竹ト云盲人ヲ使トシテツカハシケルニ、左鞠 大沼郡大谷組宮下村ノ境内ニアリト云峻難ノ弟道ヲ過ルトテアヤマツテ密書ヲ落シス、近辺ノ者コレヲ拾ヒ得テ早々黒川ヘ送りケレハ、盛氏速ニ兵ヲ発シテコレヲ討ントセシニ、大槻コレヲ聞キ山内等ト商議シ下野尻・小島・夏井等ノ地頭ト示シ合セ天正六年二月十三日大槻ハ片門村ノ渡ニ出張シ、山内ハ柳津村 牛沢組 ノ渡ニ向ヒケリ、盛氏ハ平田是亦・佐瀬不及・富田美作・伊藤大膳ノ四人ニ命シテ片門ノ渡ニ向ハシメ、自ラハ金上兵庫、生江大膳・松本左衛門・新国上総等ノ武将ヲ率テ柳津ノ渡ニ向ヘリ、互ニ峻阻ニヨリ只見川ノ岸ニ傍テ備ヲ立、散々ニ戦ヒ、兎角シテ二日計ハ支ヘシカトモ元來微勢ナレハ山内カ勢潰シトス、大槻コレヲ聞テ手勢ヲワケテ塩峰峠 藤村ノ境内ニアリヲ越テ援ケ

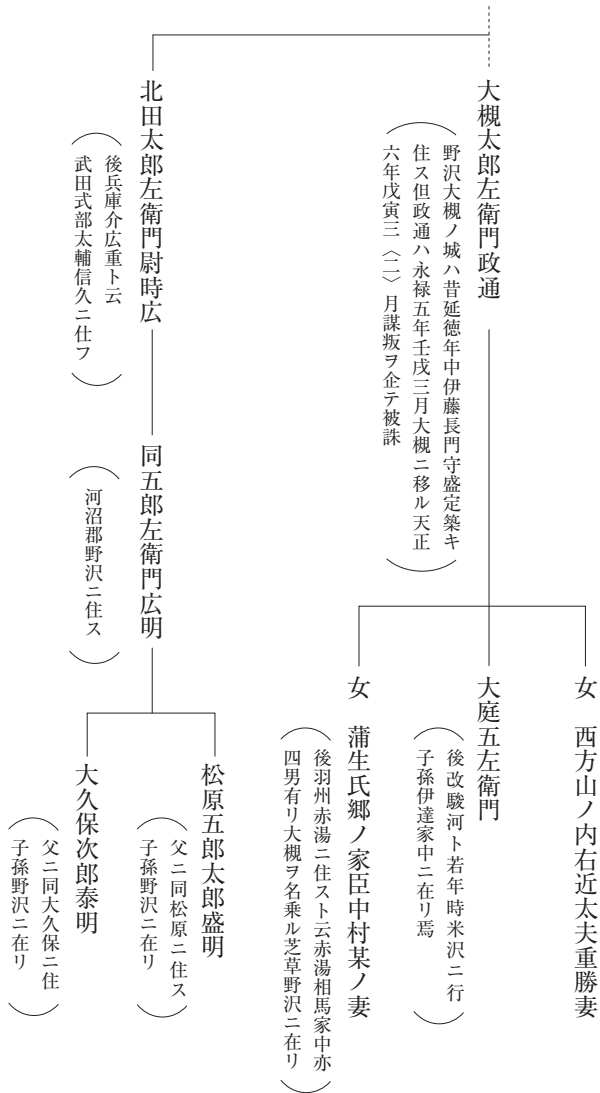
ント欲ス、十五日援兵イマタ至ラスニ山内敗シテ西方村ニ退キ自殺スト聞エケレハ、大槻力ナク一族郎党三十余人ト密ニ山道ヲ越テ山内カ上條 地所詳ナラス ノカタニ趣ントセシニ其日雪イタクフリテ道ヲ埋メ、其上皆々食ニ飢シカハ種子池淵 今大沼郡宮崎村ノ境内ニアリトイヘトモ土人ソノ地ヲ詳ニセス ト云所ノ岩窟ノ中ニコモリ居テ雪ノ晴間ヲ待ケルニ、此アタリノ関根 今大石組大石村ノ端村下井草ノ地ナリト伝ヘトモ里人ソノ事ヲ伝ス ト云所ノ獵人孫兵衛ト云者フト行カ、リシヲ大槻喜テ招キヨセ、飯ト鞋トヲ乞ヒシニ、彼者甲斐甲斐シク走りマハリテ夫々ニマカナイシカハ、大槻ソノ謝礼ナリトテ判金一枚ヲ与ヘ、サテコレヨリ上條ノ方ヘ案内セハ重ク恩賞ヲ得サスヘシト頼シカハイト安ク肯ヒ頓テ參ルヘシトテ帰リヌ、時ニ彼者案内ハセスシテ川口左衛門佐カ許ニ馳行、カクト告ケレハ、川口即時ニ衆ヲ率テ進發シ獵人ヲ先ニ立テ岩屋ヲサシテ馳向ヘケレハ、大槻ハ孫兵衛カ来ルヲ待所ニ思モヨラス巖屋ノ四方ヨリ関ノ声ヲツクリカケ川口カ勢ハヤヒシヒシト取囲ミ孫兵衛真先ニ進ミ来リキ、彼者何トカシタリケン岩屋ノ前ヘ転ヒ落ケレハ大槻コレヲ刺殺ス、寄手コレヲ見テ競ヒ集リ悉ク其郎等ヲ殺シヌ、大槻モ遂ニ川口カ為ニ討ル 旧事雜考ニ二月十四日大槻太郎左衛門被截ト記シ又十五日ノ条下ニ大槻討レシヨシヲ記セシハ解シ難シ カクテ川口其首ヲ盛氏ニ献シケレハ、大槻ハ聞ユル不敵者ナレトモ藤戸ノ謡ヲ知サリケルニコソトアサアサワライヒトソ、初隠謀ヲ企テシ時、只見川以西ノ地頭多クハ大槻ノ催促ニ従ヘシニ、天屋村ノ地頭満田主計盛胤ト云者其旨ニ応セサリシカハ、事平テ後盛氏コレヲ賞シテ感状ヲ与ヘシトソ 下野尻村ノ条下ヲ併見ルヘシ」、(中略) 下野尻村「旧家 満田和助 此村ノ肝煎ナリ、先祖ハ山口大和忠春トテ輩名家ニ仕フ、(中略) 忠春カ四世ノ孫ヲ主計盛胤ト云、天正六年大槻太郎左衛門正道反逆ヲ企テ只見川以西ノ地頭多クハ一味セシカ、盛胤斯ル敵中ニアツテ其催促ニ応セサリシカハ、事平テ後盛氏感状ヲ与ヘキ」と記される。「蘆名盛氏書下状写」は、天屋村の項に「此度大槻等謀叛不党、当表へ令参会候段、忠義之志神妙之至候、仍而状如件 天正六年戊寅二月十七日 盛氏 満田主計とのへ」とある。

それに比べて山内重勝の大沼郡大石組西方村の記載は、「天文十四年大石組沼沢村ノ地頭山内彦次郎俊興ニ男佐馬丞氏信……カ四代ノ孫右近重勝、天正六年大槻太郎左衛門ニ語ラハレ、上杉謙信ニ内応シ輩名盛氏ニ叛ントス、事就スシテ自殺ス 野沢組野沢本町ノ条下ニ詳ナリ、併、見ルヘシ」と極めて簡潔である。

この乱の歴史的評価は、芦名氏の拠点である黒川(現、会津若松市)から遠く離れた野沢郷の一地頭である大槻太郎左衛門が、越後の龍・上杉謙信に与し、会津太守・芦名盛氏と戦った点であり、何よりも大槻太郎左衛門側には、只見川以西の多くの地頭が従い、それに対して芦名氏側は四天王や重臣を総動員し、大槻太郎左衛門の乱を鎮圧したところにある。

3 「大槻太郎左衛門の乱」物語の拡散

大槻太郎左衛門は、【表1】m『会津鑑』によると「大槻ノ館 東西四十二間 南北三十間 延徳（二四八九〜一四九一）ノ頃伊藤長門守盛定築ク、永禄五年（一五六二）壬戌大庭太郎左衛門政道住ス、天正六年（一五七八）寅家亡其跡ニ建ツ寺ヲ」、「大槻太郎左衛門政通ニ至テ、七十貫ノ地ヲ取上ケ残三十貫ノ地ヲ領ス、野沢原町、下野尻・荒久田計也、永禄五年壬戌三月野沢ニ来テ本町ノ内大槻古館ヲ繕ヒ住ス、天正六年戊寅二月十七日討死」と記され、系図は以下の通りである。



最後の松原五郎太郎盛明は、野沢原町村北分肝煎・松原屋齋藤兵右衛門家の祖先・松原勘右衛門だと推定できるが、大久保次郎泰明が中野村端村大久保肝煎の清野幸右衛門家の先祖に比定されるかは不明である。何よりも大槻太郎左衛門と一緒に打ち取られたとされる「妻子下人」・「一族郎党三十余人」の素性は全くわからないが、太郎左衛門の息子と娘が成人している。注目すべきは、一族の北田時広も「太郎左衛門」を名のっている。その一方で『大槻家沈浮録』・『安積八幡文書』において安積伊藤氏の由緒書が存在する。大槻太郎左衛門とは大槻行綱だとされ、仙台藩支藩角田藩や奥州道中の須賀川宿に子孫があるとされている。

【史料2】『大槻家沈浮録』（福島県郡山市大槻町長泉寺所蔵）

三郎右衛門高行、其子太郎左衛門行綱父子ノ代、家臣相楽、大河原カ執事ニヨツテ永禄二年、主公会津ノ城主葦名修理太夫盛氏ヲ蔑ニシテ憤ルコト多年、故ニ会津ヨリ平田左京亮氏範、富田美作守滋実ヲ遣シテ相楽勘解由、大河原弥平太ヲ誅ス、大槻ノ威ヲ搦ル、是ノ世ニ乗シテ田村月斎（顕氏）、永禄五年大槻ノ城ヲ攻、高行、行綱親子在会津故、其間是ノ城ヲ奪ント欲ス、大槻親子俄ニ会津ヨリ来テ月斎ト戦フ、

高行ハ永禄六（年）二月四日没、法名崇山道麟、一子行綱ノ世臣ノ非礼ニヨツテ天正四年稍禄ヲ貶シテ僅三十貫ヲ与フ、大槻ノ側ノ地、客館ニ移サル、遂天正六戊寅年ノ春二月十四日会津ニ於テ行綱ヲ戮セラル、故ニ行綱婿山内右近、会津西方村ニ在テ密ニ上杉党ニ内応シテ怨トス、山内右近、西方ヨリ川口左右衛門左等ニ使トシテ盲者斎竹ト云ルヲ令テ密書ヲ通ス、途中左衛門移ノ時、彼密書ヲ墜ス、捨（捨）者急会津黒川ノ城主ニ告ク、若名刑部允盛隆大忿テ日時ヲ移サス兵ヲ發シテ是等討ント欲スル故、大槻、山内議テ野尻、小嶋・夏井ノ衆兵ヲ出シテ片角（門）川ノ渡ニ陣張ル、主公葦名刑部允盛隆聞計、平田是亦斎、佐瀬不及斎、富田美作守、伊藤大膳亮ノ四士武将トシテ各軍卒伍ヲ分チ黒川ヲ發ス、川ノ傍ニ至リテ矢戦ス、主公老隠止々斎翁（盛氏）ハ自ラハ金上兵庫、生江主膳、松本休意、新国上総等武將ヲ励シ伍ヲ双テ柳津口ニ到ル、復讎大槻ノ徒片角（門）ニ陣ス、山内徒ハ柳津川ヲ支エテ二日一夜相戦フ、山内勢稍微而大槻、山内ヲ統ント欲シ戦コト急ナリ、黒川勢聞之、伍ヲ分チテ藤ノ村塩峯ニ陣シテ大ニ戦フ、援兵十五日ニ至トモ未來ラス、山内殖（ママ）敗シテ晚ニ及ンテ西方村ニ退キ自殺ス、大槻丹後守行久力欠シテ兵三十四人ヲ卒メ密ニ山内領ニ忍遁ント欲上條（二）走り入ントスル途中、宮崎村ニ到リ種子淵山ニアリテ時大雪ニシテ路支ヲ埋ミ、跣足歩行難シ、飢食惘然トシテ躊躇タルノ時、関根村ノ獵者孫兵衛ニ逢フ、大槻、孫兵衛依テ飯鞋ヲ憫乞、彼レ諾シテ両者ヲ与フ、大槻謝シテ判金一枚ヲ与フ、又上條道ニ走り行ントス、孫兵衛、事ヲ川口ニ告テ衆兵ヲ催シテ山ヲ囲ンテ大叫、孫兵衛ヲ先登トシテ大槻ヲ尋、大槻、孫兵衛ヲ見テ忿然トシテ孫兵衛ヲ斬ントス、川口勢進寄テ行久カ首ヲ奪ル

カ故、家臣隨兵鬪聞死ス、其頸ヲ黒川ノ止々齋翁並刑部允盛隆ノ御前ニ献ス、

(中略)

仙台角田藩 大槻三郎右衛門六十六歳祐祥 (花押)

岩瀬須加川千保 伊藤得

(花押)

【史料3】『安積八幡文書』

一、山東郡於三在家高三百貫文之処為盛舜沙汰因高行勇戰任其功許之在所令掌領訖知行永不可有相違候仍与之牒如件  
 天文十九年(一五五〇)六月四日 盛氏(花押) 大槻太郎左衛門とのへ

大槻太郎左衛門がいずれの系譜に属すること以上に、何よりも野沢地頭の大槻太郎左衛門の敗北が、会津支配を狙った上杉謙信の敗北として記憶され、その戦いの一カ月後に謙信が死去している点が問題なのであろう。上杉謙信が大槻太郎左衛門の乱に、自棄酒をおり死去した側面もあるといっても嘘ではなからう。一方、敗れた大槻一族は太郎の名を遠慮し、その後、野沢郷に戻り肝煎等の村役人や商人になるが、芝草村肝煎は大槻庄(荘)次右衛門を襲名している。

大槻太郎左衛門の乱終結後、野沢地頭には荒井新兵衛(重信)や荒井万五郎(正憲)が就任し、芦名盛氏及び盛隆親子の使者として、天下人である織田信長や豊臣秀吉に貢物(馬・蠟燭・松尾梨)を届ける。以下、芦名四天の宿老に次ぐ三十八館主の一つである荒井家の系図を西暦を付して掲げてみよう。

頼俊 荒井信濃守 若名小太郎天福元年(一二二三) 癸巳生

(中略) 正元元年(一二五九) 己未郡山合戦ニ高名シテ文応元年(一二六〇) 庚申五貫文地増賜リ河沼郡野沢館内ニ住ス号信濃守自是子孫野沢ニ住ス

頼任 荒井信濃守 童名仁科九郎後左京介

正安ノ頃(一二九九)一三〇二)横町ニ館ヲ築ク

嘉元元年卯(一三〇三)諏方ノ祠ヲ建テル

元弘二年申(一三二二)如法寺立テ替エ

正勝 荒井新左衛門尉 後改信濃 康永三年(一三四四)甲申生……

正平十八・貞治二年卯(一三六三)母法羽比丘(尼) 如法寺ニ大鐘ヲ奉納

道尚 荒井小五郎後改掃部介 延徳元年(一四八九)己酉生 代々野沢ニ住ス

重信 荒井右馬允 永正十四年(一五一七)丁丑生 仙道安達郡入間ニ住ス改荒井

二本松義繼旗下後輩名盛氏ニ属三十五貫文於共 又野沢帰リ入道道隋 天正十年(一五八二)己午(七)六十六才 若名新兵衛

頼成 (頼重カ) 荒井伊兵衛永正十七年(一五二〇)庚辰生 野沢家督シテ改信濃 子無弟ヲ養子トス

正憲 頼重養子 荒井万五郎 天文十六年(一五四七)丁未生 後主計正

大槻城主大庭太郎左衛門叛逆時片門合戦ニ顕功名

伝曰河沼郡稲川庄野沢原町地頭荒井万五郎正憲ハ度々軍忠有テ天正六(二)年(一五七四)甲戌二十五貫文ノ地増宇津野(旧五目組・喜多方市熱塩加納町：引用者)賜今五十貫文ノ地頭ト而野沢ニ住ス干時天正九年(一五八一)ニ付辛(七)太守昔名盛隆為名代織田信長公、勤仕ス依盛隆任三浦介正憲ヲ八月六日京ハ(三)着又勅宣ノ御綸旨醍醐密教院会津へ持下向ス

最後に記した荒井万五郎(正憲)が大庭氏とされる大槻太郎左衛門と片門で戦ったとされるが、【表1】n『新編 会津風土記』野沢原町の「古

【表4】 大槻太郎左衛門最後の所領

史料	永楽銭三十貫の地		
異本塔寺長帳	下野尻	大槻城(野沢本町)	
会津旧事雑考	大槻邑	客館(原町の古館)	
会津鑑	野沢原町 (本町・大槻古館)	(下野尻半から) 下野尻	荒久田(黒川近郊)
新編 会津風土記	野沢本町	野沢原町(原町の古館)	茅 本
大槻太郎左衛門乱次第	茅 本	野沢原町→ 野沢本町・大槻→ 原町・御茶屋屋敷	里前(荒久田?)
大槻家沈浮録	大 槻	客館(原町・御茶屋屋敷)	

蹟 館跡二一ハ横町ノ北米倉ノ地ナリ東西五十間、南北一町計、東北ニ大槻川回り西南ニ堀形存シ土居モ残レリ、正安ノ頃荒井信濃守頼任ト云者築キ其子孫新兵衛某、万五郎某ト云者住セシト云ヘトモ許ナラス、元亀ノ頃大庭太郎左衛門住セシト云」と記された大槻太郎左衛門は大槻館から荒井氏の居館であった荒井館に移っていたという記述に対する回答は見いだせない。また横町・荒井館築造前に、野沢館が存在していたことになっている。

大槻太郎左衛門の乱の記載は、〔表1〕j『会津旧事雑考』天正六年戊寅二月十四日の条、〔表1〕a『塔寺八幡宮長帳』の異本『異本塔寺長帳』天正六年戊寅の同日の条では、n『新編 会津風土記』と同様の記載がなされ、同書の種本の役割を果たしている。さらに野沢宿商人組頭・小島平兵衛家に残された『史料4』『大槻太郎左衛門乱次第』<sup>④</sup>には、大槻太郎左衛門敗走の経路が詳細に語られ、校訂者として青坂村肝煎・三留勘三郎と中野村源次郎(亀之丞)の著名がある。ここでも大槻太郎左衛門が安積伊藤氏であるのか、菅名氏支流の北田大庭氏なのかの記載はない。

#### 【史料4】

野沢与小杉山村(田崎)宮内ト申者、年八拾之時、親之申伝覚申ニ而物語仕候次第如斯事、(中略)大槻人数引分、藤村之塩峯峠を打越、山内右近太夫方江加勢可仕と存候所ニ、二月十五日之晩、山内右近太夫軍ニ懸負、西方村へ引込切腹仕候、大槻太郎左衛門ハ椿村ヨリ引返シ、青坂村懸野沢江引入、其ヨリ二月十六日ニ妻子下人三拾人計ニ而野沢如法寺・中野・大窪(久保)を掛ケリ山村ヲ越、大沼郡水沼村分大山越致、山内右近太夫知行所小川庄上条江落行可申覚悟ニ而大沼郡宮崎村分種子池淵と云山迄落行候、(中略)

一、大槻太郎左衛門、越後景虎公ヲ頼候得共、俄之合戦ニ候得ハ景虎之御加勢出合不申候由、伝承候由ニ御座候事、元禄十四年(一七〇一)巳三月日 但寛文十三年(一六七二)写  
ここで注意を払いたいのは、大槻太郎左衛門が最後にえたとされる永楽銭三十貫の地がどこであるかということである。そこで〔表4〕に地名を示してみよう。共通するのは野沢郷大槻館のあ

る大槻である。その他の地名については異同があり、荒井氏の古館であった客館（のちの御茶屋敷）とつづく。【表1】 m『会津鑑』の芦名氏城下黒川近郊の荒久田は、大槻太郎左衛門||北田大庭氏説を補強するものとなっている。しかし、なぜ安積伊藤氏説と北田大庭氏説が併存するのかという疑問に対する資料が存在する。

それは『享保十六年 塩坪古事雜記』<sup>1)</sup>であり、「赤城玄蕃（中略）ニ（夏井：引用者）村ヲ加増トリ、（中略）其孫玄蕃彈正トモニ、天正六年大槻ニ党シテ出陣セシカト夏井へ帰り、同心ナキヨシ盛氏公へ云ワケテ居、（伊達：引用者）正宗公乱入後、上杉家へ内応セントセシ所ニ菅信濃、下筋押ニ居、此事ヲ聞テ野沢へ玄蕃ヲ招呼ヒ、原町（橋谷田：引用者）又右衛門宅ニテ鉄抱（砲）ヲ以テ打取、其ヨリ信濃、夏井へ押ヨセテ残族ヲ亡ス、扱玄蕃ノ子弥兵衛ハ遁レテ上杉家へ仕へ夏井氏トナル、其子孫今ニ上杉御家ニテ夏井氏ナリ、但赤城氏ハ天（桓）武天皇ノ御末ト云々

一、大槻氏ハ在名ナリ、本大庭景親ノ末ニテ平姓ナリ、後ニ伊藤家ヲツギ藤原姓トナル  
右條々重勝之言而実久書之

享保十六年（一七三一）辛亥二月十七日

すなわち大庭太郎左衛門政通が、本来の大槻館主である伊藤大槻家の養子になったという記述である。「大槻等謀叛不党」とされる反芦名勢力の「大槻太郎左衛門」は複数人いても矛盾はないのである。

#### 4 周辺自治体史での大槻太郎左衛門の乱

ここではある程度、大槻太郎左衛門の記載がある自治体史の紹介を行なう。まず安積伊藤氏説の郡山市であるが、安積伊藤・大槻氏系図では以下のように記される。

大槻祐高（安芸守）―祐道（左近助）―道久（長門守）―道綱（左近助）―道定（右近助・沙弥）―盛定（長門守）―定久（安芸守）

高久（将監・丹後守）―久行（三郎・藏人）―高行（三郎右衛門）―行綱（太郎左衛門尉）

「行久(三郎衛門・伊達成実)に仕える」

行頼(二階堂氏重臣・須田備前に仕える)

野沢・大槻館を築いたとされる伊藤長門守盛定が登場し、『史料2』『大槻家沈浮録』の中の仙台角田藩の大槻三郎右衛門祐祥の先祖として久行と岩瀬須加(賀)川千保の伊藤得先祖としての行頼が末尾に記される。

郡山市大槻の大槻館は、大槻伊東氏(または大槻氏)の観応期以来の本拠地とも推定される中世城郭であるが、安積伊東氏全体が一族としての求心力を欠いていたことなどから、戦国時代末期には東西南北の四方から芦名氏、三春田村氏、伊達氏、二階堂氏などの圧力にさらされ正に草刈り場の様相を呈するに至ったものと考えられる。永禄二年(一五五九)に芦名盛氏は大槻城(館)の大槻伊東氏の所領に進攻し、安積地方は蘆名氏の勢力圏に置かれることとなった。

永禄五年(一五六二)には、三春田村氏の一族である田村月齋が阿武隈川東岸から安積地域に侵入し、当時の城主であった大槻三郎右衛門高行が討死(詰め腹)を遂げ、その嫡子である太郎左衛門行綱はその去就が定まらなかったことから家臣団の分裂を生じ、大槻氏の庇護者であった芦名氏により葉山館に二年の間、幽閉されたとも伝わり、この時点で領主としての大槻伊東氏は事実上滅亡を遂げた。なお行綱の死亡後には嫡男行久は伊達成実を頼り、弟行頼は二階堂氏の重臣である母方の祖父須田備前を頼ったとされる。大庭太郎左衛門政通の養父とは、安積伊藤氏の大槻太郎左衛門尉行綱ということになる。

つづいて会津地方の自治体史では、まず喜多方市高郷町では「天正六年二月、野沢の大槻政通と西方村の地頭山内右近(重勝)等が、芦名盛氏に背いておこした戦いで、この戦いに本村夏井の赤城玄蕃は一旦、大槻側に組し出陣したが、途中引き返し盛氏に忠誠を誓ってことなきを得たという。同じく夏井の千手院正直は参戦し片門で討死している。塩坪の館主、斎藤掃部実興(中村佐馬允)は乱をさけて奥川郷小綱木へ隠居する」とされる。明らかに前掲『享保十六年 塩坪古事雜記』が下地になっている。

只見川東岸の河沼郡柳津町では、「天正六年二月十三日から十五日にかけて、山ノ内重勝は芦名盛氏と小巻館の付近、柳津の渡、小巻河原で合戦したが敗れている。(中略)山ノ内重勝は敗退した。そのため、現在、小巻に乱斗ノ下・城戸場・打人などの地名を残している」と柳津や藤の戦いとされてきた芦名盛氏と山内重勝の戦いが、只見川西岸の小巻であったことが記されている。さらに大寺磐梯山恵日寺の命で、のちの河沼郡野沢組夏井村他只見川阿賀川流域十八ヶ村の代官を務めたとされる野沢組藤村の肝煎・斎藤久次家の系図には、永正元年(一五〇四)生まれの斎藤政直(佐渡)が天正六年の大槻太郎左衛門の乱に参戦して、七十五歳という信じがたい高齢で片門河原において討

ち死にすることが記されている。<sup>(18)</sup> 斎藤佐渡の家系は、只見川阿賀川流域の野沢組尾登村や阿賀川支流鬼光頭川海道組白坂村端村熊沢に足跡を残している。

山内重勝の西方鳴ヶ城があった大沼郡三島町では、山ノ内重勝領地百貫文の地や家臣団を書き上げている。何よりも河沼郡大久保・小杉山・黒沢、越後国蒲原郡小川庄山内・山垣(小平森)・大魚・藁内の地名は大槻太郎左衛門敗走の経路との関係で、また計二百騎(二百戸)に及ぶ家臣団の苗字は重立ち層との関係から興味深い。<sup>(19)</sup>

なお山内重勝の系図は、以下のように記されており、妻の素性は不明で二人の息子は成人したとされている。

『鳴ヶ城山内系図』

山ノ内権太夫輔俊安(享保元年(一四五二)生、天文元年(一五四〇)死。享祿四年(一五三二)沼沢丸山城を築く)

沼沢彦次郎俊興(文明十四年(一四八三)生、天文九年死。父と共に丸山城に入る)

一、女

二、沼沢政家(永正十六年(一一一九)生、元龜二年(一一七二)死。丸山城主、弟氏信に西方三十貫の地を分譲す)

三、山内左馬允氏信(永正十七年三月一日生、若名竹五良、永祿五年(一一五六三)八月九日死、四十才。兄政家より分地三十貫文を領し、西方比事城を改築して鳴ヶ城と名(づ)く)

一、同 右衛門信重(天文五年七月六日生、若名善五良、永祿三年三月二日死、二十五才。子無き故弟俊秋を養子家督とす。岩城合戦の軍功により芦名盛氏より加増され、大高寺を滅ぼし都合百貫を領す)

二、同 和泉介俊秋(天文七年三月二十日生、若名善次良、永祿七年八月二日死。弟重勝を養子とす)

三、同 右近太輔重勝(天文十年三月十五日生、若名右馬介、天正六年二月十五日三十八才、芦名盛氏と小牧(巻)原にて戦い敗走して自害す)

「一、同 弥太良正勝(永祿元年(一五五八)十二月二十日生、天正二年十七才の時米沢に行き伊達輝宗に仕う)  
 「二、山垣平太夫重隆(天正五年正月九日生、父重勝自害後人質として荻名家に参り成長す。文祿三年(一五九四)蒲生氏郷に仕え子孫若松に有)

さらに南会津郡旧南郷村では、天正六年、「耶麻(河沼)郡野沢村大槻城主大槻正通の反乱が起きた。(中略)『旧事雜考』は一方的に大槻氏の側に非を挙げてゐるが、只見川沿岸の山内一族と伊南川の河原田氏まで一度は大槻の側に立った。(中略)上流の伊南河原田氏まで加わったのは横田山内氏等との姻戚になっていたので理由なのであろう。(中略)伊南河原田氏が、一族とはいえここでは反蘆名氏の側に立ったことは注目される場所である」と反荻名勢力が会津四家の一つ河原田家までも巻き込んでいたことを記している。

これを補強する記述として、大沼郡金山町では「山内が荻名の被官としてすんなりおさまるような勢力でもなかった。横田(山内一族の総領家：筆者)の妹婿たる伊南河原田氏をすべて糾合すると、荻名に劣らぬ大軍となる。(中略)実際問題としても、山内諸族はそろって大槻西方の勧誘に応ずる形をとらなかつた。川口がその大槻鎮定の先頭にたつていて、ほぼ想像がつく」と大槻西方山内連合の脆弱性とその上での河原田氏引き込みの動きの背景について述べているのである。

### 三、村役人及び重立ち層の由緒創出

#### 1 寺社・旧郷頭家の由緒創出

【表1】 n 『新編 会津風土記』編纂の過程で大槻太郎左衛門をして「由緒」を会津藩庁に向けて創出しようとしたのは、野沢原町村の鎮守(村社)熊野権現と愛宕権現(將軍地蔵)の法印である本山派大正院(大聖院・大勝院・大昌院とも表記する)である。大正院は越後街道野沢宿のほぼ中央南側に里修験道場を設け、屋敷裏には先達宿である柳屋の経営をもしていた。

前述した野沢原町族司・小沢勇四郎の【表3】 f 『享和三亥年 河沼郡稲川庄野沢郷 野沢原町村』に「一、当村に社在り候、本山修験大聖院と申す者の先祖は天文中大槻太郎左衛門と申す者、関東より参り候、海蔵院と申す者の子孫に御座候」という記述が残される。これは山本定平の【表3】 1 『旧記書抄』でも熊野権現が鹿島社と相社になっており、その建立者は大槻太郎左衛門であるという伝承によつたも

のである。しかし『新編 会津風土記』に採用されず、大正院は野沢地頭・荒井万五郎の子孫を選択して近代にいたる。大正院にとっては、先祖が大槻太郎左衛門でも荒井万五郎でも矛盾なく採用できる存在であったのだろうか。

つづいて野沢郷社・諏方神社神官の伊藤薩摩守(対馬守)家である。神官伊藤家の系図〔表3〕r『野沢みやげ 大山祇神社案内』は次のように簡単である。伊藤祐光(四郎)―菅原頼国(刑部左衛門)―四代略―伊藤與定(刑部少輔)―九代略―直久(新兵衛)―直重(近江守)／利兵衛(郷長)―三代略―直俊(薩摩守)…。安積伊藤・大槻家の家系から、永録七年(一五六四)の会津野沢・金剛山如法寺鉄釣蟾螂(現、奈良国立博物館所蔵)に記された大槻刑部少輔與定を経て、野沢新郷組郷頭・伊藤理兵衛を組み込んでいる。事実、神官伊藤家は野沢組郷頭・長谷川久七家や野沢本町村肝煎・石川市十郎家、野沢原町村北分肝煎・斎藤兵右衛門家との婚姻を通じて、地域の重立ち層との関係を深めていた。何よりも大槻館主であった安積伊藤・大槻氏との系譜を強調しているように思われる。

最後に、安積伊藤・大槻氏の正統な系譜を引くと考えられる野沢新郷組郷頭・伊藤理兵衛(利兵衛)の子孫である与兵衛(与平)家の系図〔表3〕o『野沢小学校郷土誌』を検討してみよう。伊藤与兵衛家は、伊藤祐親(次郎)―祐清(次郎)―祐信(次郎)―定頼(三郎) 会津芦名直盛二仕へ野沢大槻ノ城二住ス―盛貞(定) (長門) 野沢大槻二住ス 文明年中―盛光(大膳正) 野沢二住ス―盛頼(兵部少輔)―盛秀(主殿頭 堤沢ヲ領ス)―重弘(長門)―重長(大膳正) 野沢二住ス―頼任(長門) 野沢二住ス―信俊(伊藤伊勢号政所 若名理兵衛) 野沢二住ス 天正年中―信重(茂エ)左 衛門 野沢二住ス―吉春(与兵衛) 野沢二住ス―吉重(丹治) 野沢二住ス―春重(与市)―丹治・精右門(清右衛門)・眞治(直治・直次)・与平〔野沢原町村百姓〕とつづくとされる。延徳元年(一四八九)の如法寺大般若経唐櫃底墨書銘に名が残され、大槻館を築いたとされる「藤原成田今大槻長門盛定」が記されているが、すでに父・定頼が大槻城に住んでいるとされる。

何よりも伊藤与兵衛家は、野沢組内で肝煎を務める堀越・泥浮山・出ヶ原諸村等の伊藤(伊東)家の総本家格であり、野沢宿においても藤屋を商号とする商人を輩出し、一時期は堀越村の伊東五兵衛とともに野沢組仮郷頭を務め、若松の芦名極楽寺からも芦名家家臣としての認定をえた家である。大槻館主である伊藤(大槻)長門盛定の子孫として長門頼任が登場し、荒井信濃頼任との関連が気になる。また伊達政宗の会津攻めにさいして、地域を代表して戦後処理にあたった政所伊藤伊勢が理兵衛(信俊)という名で記載されている。政所伊勢は、俵物百五十六俵を伊達政宗に献上している(『新編 会津風土記』野沢原町)。ここにおいても中世野沢の権威である安積伊藤・大槻氏と荒井氏が組み込まれている点に注目したい。なお伊藤伊勢は野沢原町の草分け六人衆の一人でもある。

## 2 肝煎層・豪商の由緒創出

すでに記述したように大槻太郎左衛門を何よりも意識した肝煎は、野沢原町村西隣の芝草村肝煎・大槻庄次右衛門家である。野沢組内の肝煎層で大槻を姓にしている唯一の家でもある。また野沢宿内には、旅籠を生業とする松本屋大槻茂八が存在する。

大槻庄次右衛門家では、先に述べたように太郎名を禁忌とし、次郎・治郎を当主の名のりとする。それは遠祖・大槻太郎左衛門への遠慮だとされている。幕末近くになると大槻庄次右衛門家は、野沢代官所帳書を務め、村方一件にあたっては肝煎と戸前(小前)百姓の仲裁をさかに行なう<sup>22)</sup>。また野沢原町村北分肝煎・斎藤兵右衛門家七代目兵次(兵庫)と大槻家当主である政之助の長女ツネ(常)との縁組を行っている。何よりも斎藤兵右衛門家は野沢原町の草分け六人衆の一人・松原但馬の子孫とされ、松原但馬は村内にある隆源山常楽寺を復興した人物(『新編 会津風土記』野沢原町)として同寺の檀家総代を務める家柄であった。大槻家はこの縁組により、檀家総代格をえて、常楽寺の普請と運営に努め、野沢地域での威信を獲得していくのである。

六代目斎藤兵右衛門(安頼)の倅である野澤雞一(旧名斎藤九八郎)は、京都府議会議長や京都商工会議所会頭を務めた山本寛馬の『管見』の口述筆記者、自由党のトップ・リーダー星亨の義弟として著名な人物である。野澤が明治年間以降に著した『表3』m『閑居隨筆』には「芝草村ノ肝煎大槻政之助(中略)大槻家ノ祖先ハ大槻太郎左衛門トテ矢張輩名家ノ館持ニシテ現今本町遍照寺ノ所在地ハ其館跡ナリト云ヒ伝フ実ニモ其地形城砦ノ型歴然トシテ粉フヘクモナク其砦下ニハ大槻村トテ僅カ四五戸ハカリノ小部落アリ従来本町ノ端郷 支村 タリ個ハ大槻太郎左衛門ニ由緒アルニヤ」との記載をしている。また義弟として大槻家と親戚関係になったことを誇りに思っているのである。

つづいて大槻館があった野沢本町村はどうだろうか。当時の肝煎は酒屋(酒造業)石川市十郎家であり野沢宿商人組頭をも務めていた。十九世紀初めまで、野沢本町村は、野沢原町宿の馬継の宿(助郷役)であり、宿駅役ばかりか市場の機能も公式には行つてはならなかった。この「不平等性」について野沢原町村と同じ権利を公然と主張したのが、野沢本町肝煎・七代目石川市之丞(友矩)である。市之丞は婿養子にいらっていた実弟の原町北分肝煎・五代目斎藤兵右衛門(伍助)とともに本町を野沢原町宿に編入させ、文化三年(一八〇六)には野沢宿とし、翌年に蔵元「会津栄川」を会津藩の酒箒(酒造免許)をえて公式に創業する。その跡を継いだ八代目石川市良右衛門(益友)は、本町の権限を強化すべく自らの家系を戦国武将・石田治部少輔三成に求め、外孫である野澤雞一やのちにアダム・スミス『国富論』当時は『富国論』等の日本初の翻訳者となる直孫の石川暎作に様ざまな由緒を語る。その一方、文化六年に野沢原町代官所(御天王様・常楽寺東)から横町館之内に移転した野沢代官所は、三年後には石川家から肝煎職を剥奪し、本町を十九年間、御用場支配(直轄武士支配)とし、肝煎と地首を廃

止する。石川家の肝煎復活の活動を支えるものとして、野沢本町の村格の上昇がはかられ、『新編 会津風土記』での大槻太郎左衛門をはじめとする記載の豊富化がなされるのである。

近年の考察として田中四郎氏は、天文二年（一五三三）から幕末維新期に至る史料に登場する一ノ戸村の重立ち（肝煎役他）である山ノ内（山内）善十郎との関係から、山ノ内家の由緒を推察している。田中氏は一ノ戸・山内輝智氏の古い伝承を記述し、「天正六年（一五七八年）重勝の叔父山ノ内政通は、野沢村（野沢郷のこと…引用者）大槻城主の折、芦名氏に叛く」と驚くべき記述をしているのである。すなわち山内右近太輔重勝の義父であるとされた大槻（大庭）太郎左衛門政通は、山内重勝の叔父である山ノ内政通であり、大槻城の城主として芦名盛氏と戦ったことにされているのである。山内重勝の父山ノ内左馬允氏信には『鳴ヶ城山内系図』によると姉の女某と兄の丸山城沼沢政家とがあり、山ノ内政通に該当する人物はみあたらない。しかし女某の嫁ぎ先や沼沢政家の「政」の継ぎ名が、大庭家との偶然の一致なのかについては、注意が必要である。

### 3 狐敵討物語への反映

江戸末期より、野沢組地域では様ざまな万歳の読物が現れる。一つは寛政十一年（一七九九）に記された『狐敵討虚説（浮世）物語』である河沼郡野沢組上谷山（程窪・泥浮山・二ツ栗・長桜四カ村）の「おつな」狐の復讐物語<sup>26</sup>であり、もう一つが天保五年（一八三四）正月に記された『会津野沢 狐敵討物語（狐物語敵討物語稲荷理聖記）』の野沢組芝草村の「おこん」狐母子の仇討ち物語<sup>27</sup>である。特に後者の物語は、大槻太郎左衛門の子孫とされる大槻庄次右衛門が肝煎を勤める野沢組の芝草村近辺が舞台になる。

物語は、芝草村の北・阿賀川川べり安津窪穴に住む「おこん（根々）兵衛」が、妻の「おこん（根）」に横恋慕した野沢原町村の「猪の鼻与吉」、それに共謀した森野村の「糠塚山森の進」、松尾村の「三本松の太郎丸狐」、野沢原町村の「小谷田のおまん」によって殺害される。身重の「おこん」は悲しみにくれながらも「ミとり丸」（別の史料では治郎兵衛）と「おは津」の二匹の子狐を産み育て、野沢本町村の稲荷大明神と何よりも耶麻郡慶徳祖慶徳村の慶徳稲荷奥の院に住む白虎慶信の力を借りて、仇である「猪の鼻与吉」・「糠塚山森の進」・「三本松の太郎丸狐」・「小谷田のおまん」を討ち果たすのである。モデルとしては、「糠塚山森の進」が森野村肝煎・山口臨右衛門<sup>28</sup>であり、野沢代官所輪番帳書として大槻庄次右衛門と同格であった。山口家の先祖は、大槻太郎左衛門の乱の後で芦名盛氏より茅本村端村樋ノ口地頭を任された渡部中務<sup>29</sup>の家臣であったと伝えられる。「三本松の太郎丸狐」は、松尾村を居村とする郷頭・長谷川久七であり、松尾村の地頭・宇多川信濃守道忠の子孫

とされる。太郎左衛門の乱の時の動向は微妙である。また「猪の鼻与吉」と「小谷田のおまん」は、太郎左衛門の乱後に野沢原町村に残った多くの家が念頭に置かれているように考えられる。また野沢地域では、「小谷田小太郎、猪鼻与吉、下小屋お梅に、小島林の七色狐、三本松の牛蒡狐」という『狐の掛言葉』が存在している。

その一方で、【表1】m『会津鑑』によれば大槻太郎左衛門には遺児として、米沢の伊達家に仕えたとされる大庭五左衛門(駿河)と蒲生氏郷の家臣中村某の妻となった娘があったとされ、後者の子孫が大槻を名のり芝草・野沢原町両村に住んだとされる。すなわち「おは津」が芝草村肝煎・大槻庄次衛門や野沢原町村の旅籠・松本屋大槻茂八の先祖に比定される。『会津野沢 狐敵討物語』の異本『狐物語敵討物語稲荷理聖記』が「ミとり丸」を治郎兵衛として「おは津」を総領にあてているのは、大槻庄次右衛門家の系譜を念頭においているからであろう。

この物語には、松尾屋の雲の井(野沢組郷頭・長谷川久七カ)・鍛冶屋の七ツ梅(前野沢本町村肝煎・渡部四郎左衛門のちに営業権が石川市十郎家に移り、会津栄川となる)・小嶋屋の清見川(野沢宿商人頭・小島仲右衛門)・和泉屋の菊の露(野沢宿商人頭・小島平兵衛)・万願寺屋の男山(野沢原町村酒屋・星小吉)が登場するなど野沢酒造業の宣伝も兼ねている。特に野沢本町村の稲荷大明神は同村肝煎・石川市十郎を、慶徳稲荷奥の院の白虎慶信は慶徳組郷頭より野沢内郷組郷頭に赴任した家系を持つ野沢宿駅市検断である五十嵐文五郎(九朗三郎)を示していると思われる。

何よりも興行者である秋信・由信・好国が、大槻庄次右衛門が肝煎を勤める芝草村の阿賀川北対岸の耶麻郡吉田組橋谷村に住み、両村間の渡し船業にも従事していたことより、大槻家に経済的に援助されていた事情を背景に、この物語が成立したとも考えられる。

### むすびにかえて

本稿では、【表1】n『新編 会津風土記』巻之九十四「河沼郡野沢組野沢本町」の項に記載される「大槻太郎左衛門の乱」の叙述を事例として、江戸後期から始まる陸奥国会津藩野沢組由緒の問題を考察した。地誌に記載された地域の歴史叙述と実際に当該地域にすむ住民、特に村役人層や重立ち層にとって、『新編 会津風土記』に記載が存在するという事実が、どのような意味を持ちうるのかということと、どのような受容のされ方をするのかということを考察したのである。

その結果、大槻太郎左衛門は複数の人物が投影されている可能性が指摘される。すなわち大庭太郎左衛門であるか、否かという前に荒井万五郎を含む戦国期の群像が大槻太郎左衛門に収斂されて『新編 会津風土記』が編纂された可能性である。江戸末期になると神社 旧郷頭・肝煎層等の様ざまな主張や活動を正当化するものとして、大槻太郎左衛門の乱は受容されていく。すなわち家格の上昇だけでなく宿駅への編入や日常業務の円滑化に「由緒」がもたらす「社会的な力」が問題とされた。これこそが中間層（会津地方においては村役人層）を中心とする地域史の問題とした理由でもある。それは、その思惑を超えて娯楽としての万歳物語としても地域に広まっていく。

本稿では検討できなかった問題がいくつか存在する。何よりも『新編 会津風土記』繩沢村に記される「古墳（中略）小島村ノ地頭成田右馬允某ト云者ノ嫡子中務某ト云者ノ妻ノ墓ナリト云、天正中大槻太郎左衛門叛逆ヲ企シ時、成田モ一味セシカ、大槻カ軍敗レテ種子池淵ニ落行キ自殺セシカハ」では、大槻太郎左衛門が討れた宮崎の「種子池淵」と近似した名称である森腰「種子池」をその地において、「金城館（中略）天文〔正〕中金白加賀守景良ト云者住セリト云、（中略）向館大槻叛逆ノ色顕ハセシ時景良黒川ノ命ヲ受ケ築キシ所ト云」と関係する小島村地頭・成田左京の問題である。下野尻村端村大下野尻の項には「成田養寿 端村大下野尻ニ住スル医師ナリ、先祖ハ成田左京亮常定トテ小島村ヲ領セシトソ 小島村ノ條下ヲ併見ルヘシ 常定カ子右京進某ト云者初テ爰ニ来リ繼テ十世今ニ至ル」とある。大槻太郎左衛門だけではなく、夏井村地頭・赤城玄蕃や小島村地頭・成田左京亮側からの乱解明も地域の認識にとつては重要な問題となる。

次に廃寺となった野沢本町村端村大槻の円福寺についてである。同寺は「太子守宗ノ寺アリシト云、此寺端村大槻ニ近キ故大槻円福寺ト称シ大槻太郎左衛門殊ニ崇敬セシトソ、大槻館落去ノ後此寺廃セシト云、往昔此寺ノ什物ナリシニヤ今郭内興徳寺ニ、奥州会津野沢大槻円福寺常住心永第七天庚辰六月廿日右筆金資良鏡ト記セル大般若経アリ」と記された大槻円福寺と大槻館跡に設けられた野沢山遍照寺の関係である。また若松城下興徳寺の子院の一つが、野沢原町村の熊野神社と常楽寺の間に所在していたとの伝承も存在する。関連して僻地分校教育で有名な石川栄光氏は「天正の頃大庭太郎左衛門の居所、後に太郎左衛門叛逆を企て戦破れて東蒲原郡東川村の山奥に隠れ、岩屋に敗北す。…大庭の館跡に杉山村より遍照寺を移転せり」との野沢地誌を残された。石川栄光氏は、野沢本町村を野沢原町宿に併合させ野沢宿に昇格させた野沢本町村肝煎を継いだ九代目石川栄吉の実兄・石川三郎次の子孫にあたる。

事実、『新編 会津風土記』の杉山村の北に位置する洲走村の項には、「寺跡 村中ニアリ、ソノカミ光明山遍照寺ト云、曹洞宗ノ寺アリシカ延宝二年廃ス」との記載がある。大槻太郎左衛門の合戦が行なわれた片門村は現在よりも北の洲走村側に位置したということと考えると洲走村にあった光明山遍照寺が合戦の後始末に何らかの形で関係し、大槻館跡に野沢山遍照寺として移設された謎が解けそうである。

最後に「野沢組大槻の地頭大槻太郎左衛門が、天文十二年（一五四二）（ママ）山内、河原田と組んで芦名盛氏に叛し、戦破れて、新潟県柴倉川の窟にて誅された」という記載をみると、これを単なる誤りと考えるのではなく「大槻太郎左衛門の乱」が安積伊藤・大槻氏と北田大庭氏により、複数回にわたり存在していた可能性もある。

何よりも大槻太郎左衛門は城下から遠く離れた野沢郷中であって、越後の龍・上杉謙信と同盟し会津太守・芦名盛氏（城下）と戦った英雄として、地域と関係者の由緒を高めることに寄与した。それは同時に本稿において展開した地域の活性化と人材の輩出につながるものである。

### 【註】

- (1) 歴史学研究会編『シリーズ 歴史学の現在12 由緒の比較史』（青木書店、二〇一〇年）所収の山本英二「日本中近世史における由緒論の総括と展望」を参照のこと。
- (2) 白川部達夫・山本英二編『（江戸）の人と身分2 村と身分と由緒』（吉川弘文館、二〇一〇年）を参照のこと。
- (3) 久留島浩「村が『由緒』を語るとき」（久留島浩・吉田伸之『近世の社会集団―由緒と言説―』吉川弘文館、一九九五年）を参照のこと。
- (4) エリック・ホブズボウムほか編、前川啓治ほか訳『創られた伝統』（紀伊国屋書店、一九九二年）。
- (5) 本稿では、数ある伝本・筆写本のある『新編 会津風土記』のなかで、福島県会津若松市立会津図書館蔵本を底本とした丸井佳寿子編『新編 会津風土記』（全五巻、歴史春秋出版、一九九九～二〇〇四年）及び野沢代官所帳書・五十嵐八郎（俊興）が、筆写した上で朱書きを入れた『新編 会津風土記 野沢組』（年不詳、西会津町史刊行委員会『西会津町史 第四巻下 近世資料編』同編纂委員会、一九九二年）をテキストとした。
- (6) 大槻太郎左衛門の乱に関する研究で、これまでの集大成は、齋藤豊一「物語り郷土史 大槻太郎左衛門の謎」『西会津史談』第五号、二〇〇六年四月である。なお齋藤豊一氏は大槻太郎左衛門に安積伊藤・大槻氏説の立場に立っている。
- (7) 丸井佳寿子「解題」（『新編 会津風土記 第一巻』歴史春秋出版、二〇〇三年、収録）を参照のこと。
- (8) 拙稿「近世地域社会における中間層―会津藩郷頭制の一考察―」『大阪商業大学論集』第三巻第四号・通号第一四八号、二〇〇八年二月を参照のこと。

- (9) 『平等寺薬師堂内陣正面右側丈夫嵌板墨書銘』(『西会津町史 第3巻 古代・中世・近世』西会津町史刊行委員会、一九九七年、一一二～一三頁) 所収。
- (10) 登場人物については、小島一男『会津輩名時代人物辞典』歴史春秋出版、一九九一年を参照のこと。
- (11) 相馬正男編『西会津町』西会津町教育委員会、一九五六年、一六四頁。
- (12) 『清和源氏 荒井家系 左衛門尉満成後胤』東京都世田谷区桜上水・荒井治家文書。福原久磨「磨上原前後と荒井家」(『会津史談』第六三号、一九八九年五月) をも参照のこと。
- (13) 西会津町野沢原旧小島平兵衛家文書 西会津町史編さん室保管。小島平兵衛家は、野沢原町村南分の中央部に表口一三間半、奥行四二間に店舗屋敷を構え、屋号・和泉屋を名のる豪商であった。小島家は『平氏 小嶋氏系図』によれば、平相国清盛・宗盛親子に仕えた小嶋彦次郎徳勝が平氏滅亡後に長門国より奥州会津長江庄伊北川口谷横田(山内家の拠点)に退去、それより子孫が士を嫌って民間に降り、建長五年(一二五三)に小嶋三郎兵衛重長が蜷川庄野沢の里に移って旧大槻館東の地蔵中原に住んだとされる。また小島村下分肝煎・佐藤太郎兵衛家から養子を迎え、分家・仲右衛門家を創設している。その子孫がのちの民権指導者・小島忠八である。なお越後街道野沢宿の商人組頭は、野沢原町村の小島仲右衛門・斎藤兵四郎・小島太右衛門(平兵衛)・鈴木三郎右衛門及び野沢本町村の石川栄吉の五名によって担われている。
- (14) 喜多方市高郷町旧塩坪村肝煎・斎藤茂平家文書(前掲『西会津町史 第3巻 古代・中世・近世』一〇九頁) 所収。
- (15) 『蘆名盛興知行判物業』・『積達風土明細録』・『欲集直山章』を収録した『郡山市史 第8巻 資料編(上)』福島県郡山市、一九七三年を参照の事。
- (16) 高郷村史編集委員会『会津高郷村史』福島県耶麻郡高郷村、一九八一年、三九～四〇頁。
- (17) 柳津町教育委員会『柳津町誌 総説篇』上巻、福島県河沼郡柳津町、一九七七年、六〇頁。
- (18) 柳津町教育委員会『柳津町誌 集落篇』下巻、福島県河沼郡柳津町、一九七七年、七頁。
- (19) 『西方正統記』(三島町史編集委員会『三島町史』三島町史出版委員会、一九六八年、四七〇頁)。
- (20) 南郷村史編さん室『南郷村史』第1巻・通史、南郷村史編さん委員会、一九八七年、一四四～一四五頁。
- (21) 金山町史出版委員会『金山町史』上巻、金山町、一九七四年、三〇七～三〇九頁。
- (22) 拙稿「会津地方における幕末維新―野沢組茅本村を事例として―」『大阪商業大学論集』第一三四号、二〇〇四年二月。
- (23) 拙稿「星亨の時代―「星亨伝記資料」編著者・野澤雞一を中心として―」『歴史評論』第四六八号、一九八九年四月を参照のこと。
- (24) 拙稿「明治黎明期の知識人―「富国論」翻訳者・石川暎作を中心として―」『歴史評論』第四五八号、一九八八年六月を参照のこと。

- (25) 田中四郎『古代会津から明治維新までの概略的歴史について—会津四家といわれる武士団と故郷一ノ戸村について—』(私家版、二〇一八年、三七頁)。
- (26) 『寛政十一年 上谷山おつな狐敵討虚説(浮世)物語』(西会津町原・五十嵐隆二家文書)、『西会津町史 第7巻 宗教文化資料』西会津町史刊行委員会、二〇〇四年、五八〇〜五八五頁、所収。
- (27) 『天保五年正月 芝草おこん狐敵討物語記』(西会津町橋谷・佐藤政次家文書)、前掲『西会津町史 第7巻 宗教文化資料』五八五〜五九四頁、所収。
- (28) 山口臨(林) 右衛門の孫が、その再来といわれた山口千代作(千代左久)である。山口千代作は、福島・喜多方事件時のトップ・リーダー(福島県議会議長・副議長)であり、初期議会三期を衆議院議員として活躍する(拙稿「会津の地域リーダーと自由民権 幕末維新から民権へ」平川新・谷山正道編『近世地域史フォーラム3 地域社会とリーダーたち』吉川弘文館、二〇〇六年)を参照のこと。
- (29) 渡部中務の子孫であることを自己のアイデンティティにしていた人物の一人が、野口英世の恩師として知られ、衆議院議員を二期務めた渡部鼎である(拙稿「野口英世の恩師・渡部鼎小伝」小暮葉満子・田崎公司編『野口英世—21世紀に生きる—』日本経済評論社、二〇〇四年)を参照のこと。
- (30) 石川栄光「野沢誌の一部」(前掲『西会津町』四二八頁)。
- (31) 目で見える西会津郷土史編纂委員会『西会津歴史物語』福島県耶麻郡西会津町、一九七一年、一一四頁。
- (32) 大槻太郎左衛門の乱以降の地域状況については、拙稿「NHK大河ドラマ『天地人』と西会津—西会津の地に流れる『義』と『愛』の血—」『西会津史談』(第一〇号、二〇一〇年九月)収録、拙稿「慶長の会津大地震四百年と現代—NHK大河ドラマ『江』の時代の西会津—」『西会津史談』(第一一号、二〇一一年九月)収録をも参照のこと。